

て見られる詩人の心そのものにある。国破れて悲しむといい、旅に出て故郷を思うといい、ゆく春に哀れを感じるといい、流され行く友を送っていたむといい、それらは皆、よし国が違い、時代が違っても、わたしたちの心をとらえてやまないものである。殊に人々の苦しい生活を訴え詠じたものなど、今の人にはとりわけ共感を呼ぶに違いないが、それに閑静な竹林に独りを樂しむ王維の世界にしても、また月を相手に杯を傾ける李白の境地にしても、それらはまたわたしたちのあこがれ望むものに外ならない。

こう見てくると、唐詩の魅力は尽きないが、ところでそれを知るには、やはり自ら唐詩をよんでみることであり、人それぞれに好みに応じて味わってみることである。本書はそうした人々の要望にこたえるため、「よみ方」を中心に唐詩を解説したものである。読書百遍意自ら通ずといわれるように、詩などというものは、本来よんでおれば、おのずと分ってくるものである。しかしそれでは、余りにも時間がかかりすぎる。通釈、語釈の外、参考になることを解説として記すことにしたが、多少ともお役にたてば望外の幸である。

昭和四十八年三月

近藤 春雄

目次

1	詩とは	11
2	1 詩とは	21
3	2 唐詩とは	23
4	3 唐詩の隆昌	28
5	4 詩風の変遷	30
6	5 唐詩の選集	32
7	初唐—盛唐—中唐—晩唐	
8	近体・古体—絶句—律詩—排律—古詩—楽府	
9	詩の意味—平仄—押韻	
10	詩の形式	
11	詩の格調	
12	詩の表現	
13	詩の鑑賞	
14	詩の歴史	
15	詩の発展	
16	詩の衰退	
17	詩の復興	
18	詩の没落	
19	詩の再生	
20	詩の没落	
21	詩の再生	
22	詩の没落	
23	詩の再生	
24	詩の没落	
25	詩の再生	
26	詩の没落	
27	詩の再生	
28	詩の没落	
29	詩の再生	
30	詩の没落	
31	詩の再生	
32	詩の没落	



五言絕句

1	易水送別	駱賓王	35	16	二	崔顥	59
2	子夜春歌	郭震	36	17	靜夜思	李	50
3	南樓望	盧僎	38	18	秋浦歌	李	52
4	蜀道後 <sub>レ</sub> 期	張說	39	19	夏日山中	李	53
5	題 <sub>二</sub> 袁氏別業 <sub>一</sub>	賀知章	39	20	自遣	李	54
6	照 <sub>レ</sub> 鏡見 <sub>二</sub> 白髮 <sub>一</sub>	張九齡	40	21	怨情	李	54
7	春曉	孟浩然	41	22	絕句	杜	55
8	鹿柴	王維	42	23	復愁	杜	56
9	竹里館	王維	43	24	題 <sub>二</sub> 竹林寺 <sub>一</sub>	朱	56
10	辛夷塢	王維	45	25	秋日	耿	57
11	雜詩	王維	46	26	秋夜寄 <sub>三</sub> 丘二十二員外 <sub>一</sub>	韋	58
12	鹿柴	裴迪	47	27	江雪	柳	59
13	終南望 <sub>二</sub> 余雪 <sub>一</sub>	祖詠	47	28	別 <sub>二</sub> 盧秦卿 <sub>一</sub>	司空	59
14	登 <sub>二</sub> 鶴鶴樓 <sub>一</sub>	王之渙	48	29	古別離	孟	60
15	長干行 <sub>二</sub> 首 <sub>一</sub>	崔顥	49	30	新嫁娘	王	61

七言絕句

31	秋風引	劉禹錫	62	36	題 <sub>二</sub> 慈恩塔 <sub>一</sub>	荆	65
32	行宮	元稹	62	37	沙上鷺	張	66
33	尋 <sub>二</sub> 隱者 <sub>一</sub> 不 <sub>レ</sub> 遇	賈島	63	38	池上竹	張	67
34	獨柳	杜牧	64	39	春望詞 <sub>二</sub> 首 <sub>一</sub>	薛	67
35	勸 <sub>レ</sub> 酒	于武陵	64	40	二	薛	68
1	蜀中九日	王勃	69	11	哭 <sub>二</sub> 魏卿衡 <sub>一</sub>	李	80
2	涼州詞	王翰	70	12	漫成	杜	81
3	回 <sub>レ</sub> 鄉偶書	賀知章	71	13	西宮春怨	王	82
4	送 <sub>二</sub> 元二使 <sub>一</sub> 安西	王維	72	14	長信秋詞	王	83
5	峨眉山月歌	李	73	15	芙蓉樓送 <sub>二</sub> 辛漸 <sub>一</sub>	王	83
6	早發 <sub>二</sub> 白帝城 <sub>一</sub>	李	74	16	重別 <sub>二</sub> 李評事 <sub>一</sub>	王	85
7	望 <sub>二</sub> 廬山瀑布 <sub>一</sub>	李	75	17	從軍行	王	86
8	黃鶴樓送 <sub>二</sub> 孟浩然之 <sub>三</sub> 廬陵 <sub>一</sub>	李	76	18	塞下曲	常	87
9	客中行	李	77	19	碛中作	岑	88
10	清平調詞 <sub>一</sub>	李	78	20	楓橋夜泊	張	88

五言律詩

21	題長安主人壁	張謂	89
22	江村即事	司空曙	90
23	秋思	張籍	91
24	對酒	白居易	91
25	王昭君二首	白居易	92
26	二	白居易	93
27	折楊柳	楊巨源	94
28	城東早春	楊巨源	94
29	烏衣巷	劉禹錫	95
30	江南春	杜牧	96
31	清明	杜牧	97
32	山行	杜牧	98
33	泊秦淮	杜牧	98
34	夜雨寄北	李商隱	99
35	瑤瑟怨	溫庭筠	101
36	台城	韋莊	101
37	金縷衣	杜秋娘	102
38	折楊柳	魚玄機	103
6	春望	杜甫	109
7	月夜	杜甫	111
8	旅夜書懷	杜甫	112
9	登岳陽樓	杜甫	113
1	春夜別友人	陳子昂	105
2	臨洞庭	孟浩然	106
3	破山寺後禪院	常建	107
4	酬張少府	王維	108
5	送友人	李白	108

七言律詩

1	古意	沈佺期	115
2	黃鶴樓	崔顥	116
3	酌酒與裴迪	王維	117
4	登高	杜甫	118
5	左遷至藍關示姪孫湘	韓愈	119
6	香奩峰下新卜山居草堂	白居易	121
7	八月十五日夜禁中獨直對月憶元九	白居易	123
8	遣悲懷二首	元稹	125
9	二	元稹	126

五言古詩

1	送別	王維	127
2	子夜吳歌二首	李白	127
3	二	李白	128
4	長干行	李白	129
5	月下獨酌二首	李白	131
6	二	李白	132
7	夢李白	杜甫	133
8	述懷	杜甫	135
9	石壕吏	杜甫	138
10	新婚別	杜甫	140
11	買花	白居易	143
12	議婚	白居易	145
13	慈烏夜啼	白居易	147
14	燕詩示劉叟并序	白居易	148
15	念金釵子二首	白居易	151
16	二	白居易	152
17	感鏡	白居易	153
18	夜聞歌者	白居易	154

七言古詩

1	代悲百頭翁	劉希夷	156
2	春江花月夜	張若虛	159
3	蜀道難	李 白	162
4	把酒問月	李 白	168
5	飲中八仙歌	杜 甫	169
6	哀江頭	杜 甫	172
7	兵車行	杜 甫	174
8	茅屋為秋風所破歌	杜 甫	177
9	太行路	白居易	180
10	賣炭翁	白居易	183
11	新豐折臂翁	白居易	185
12	海漫漫	白居易	190
13	采詩官	白居易	192
14	長恨歌	白居易	195
15	琵琶行并序	白居易	215
16	漁翁	柳宗元	226

付 録

- 一、中国のやなぎ
- 二、唐詩の魅力——李白と杜甫——
- 三、杜甫の発見
- 四、詩人小伝
- 作者別目次

解 説

一、唐詩のよみ方

唐詩のよみ方と言っても、別に漢文のよみ方と違うわけではない。例えば

衆鳥高飛尽、しゅうちゅうこうとびつじんす 衆鳥高く飛び尽す

拳頭望三山、けんとうぼうさんざん 頭を挙げて、山月を望む

秋声不可聞、あきこゑなかなかな 秋声聞くべからず

只有敬亭山、しゅうごうけいていざん 敬亭山有るのみ

無入送酒来、なひにんしやうさく 人の酒を送り来る無し

畏向階前生、おそむかひのきざかへ 階前に向って生ぜんことを畏る

菴塞始応春、あまざせはじめてはる 菴塞、始めて応に春なるべし

前路日将斜、ぜんじゆじやうせう 日將に斜ならず

城中日夕歌鐘起

城中日夕歌鐘起る

水滿清江花滿山

水は清江に満ち花は山に満つ

独在異郷為異客

独り異郷に在って異客と為る

唯有相思似春色

唯相思の春色に似たる有り

二月垂楊未掛絲

二月垂楊、未だ絲を掛けず



11 雑詩

已見寒梅発  
復聞啼鳥声  
愁心視春草  
畏下向階前  
王維  
已に寒梅の発くを見  
復 啼鳥の声を聞き  
愁心 春草を視る  
階前に向って生ぜんことを畏る

「雑詩」中に次の詩がある。

君自故郷来 君 故郷より来る  
応に知故郷事 応に故郷の事を知るべし  
来日綺窓前 来日 綺窓の前  
寒梅著花未 寒梅 花を著けしや未だしや

「あなたはわたしの故郷の方から来られたので、きっと故郷の事を知っておられるでしょう。おでかけになる日、飾り窓の前の寒梅は、花をつけていたでしようか」「著花未」は花をつけていたか、それともまだであったかという疑問の形（というのであるが、「綺窓」から妻を連想し、これを妻のことを思うて消息をたずねた詩とみれば、「已見寒梅発」の詩は、これに対する妻の消息を伝え、心を伝えた詩とみられる。

【通釈】もう寒梅の開くのを見たし、また春鳥の啼く声も聞いた。すっかりよい春になったが、帰って来ない人を待つ身には、うれしいの心で春草を見るにつけ、階段の前の方にまで生い茂りはしないかと案じられる。  
【語釈】「雑詩」いろいろのことを詠じた詩。これは三首連作の一で、妻が旅に出た夫の帰って来ないのを悲しんでいるのを詠じた詩である。「畏下階前生」草が階段の前の方まで生いしげるのを畏れる意。草は人が通らないとはえるもの、畏れるとは、それが夫の帰って来ないことを意味するからである。

12 鹿柴

日夕見寒山 日夕 寒山を見る  
便為独往客 便ち独往の客と為る  
不知松林事 松林の事を知らず  
但有磨麈跡 但有 磨麈の跡有り

句は、「但、磨麈の跡有るのみ」とよんでもよい。しかし詩の場合は、訓読の調子の上から、「ただ」が来ても、必ず下を「のみ」でうけてよむとは限っていない。

【通釈】朝な夕なさむぎむとした山を眺めて、わたしは世捨人となつている。松林の中に何があるかは知らないが、ただ鹿の足あとをついているのが見える。（してみると鹿柴があるらしい。）

【語釈】「鹿柴」王維と同じ題で、共に遊んで唱和したもの。（日夕）朝夕に同じ。朝な夕な。よるひる。「寒山」木の枯れてさむぎむとした冬の山。「独往客」世を離れた人、世捨人。「磨麈」おじか。ここは鹿の意に用いている。

【解題】第三句は「知らず松林の事」とよんでもよく、また第四

13 終南余雪を望む

終南陰嶺秀 終南 陰嶺秀で  
積雪浮雲端 積雪 浮雲の端  
林表明霽色 林表 霽色明かに  
城中增暮寒 城中 暮寒を増す

【通釈】終南山の北の嶺が高く聳え、積雪が浮雲のはしの方に望まれる。林の上には晴れた青空が明るくさえわたり、城中は日暮れと共に寒さが加わつて来た。

【語釈】「終南望余雪」終南山の残雪を望み見て詠じた詩。「終南」は終南山のことで、長安の南にある。「望」は長安から望む意。「余雪」は残雪。「陰嶺」北の嶺。山については南を陽、北を陰といい、川については南を陰、北を陽という。終南山は長安の南にあり、長安からはその北面が見えるので陰嶺という。「積雪」つもった雪。「浮雲端」うかんだ雲のはし。「林表」